

東京圏国家戦略特別区域会議
「成田市 分科会」
～国際医療福祉大学提出資料～

「国際医療学園都市構想」における医学部の概要

平成26年12月17日

国際医療福祉大学

1. 医学部における国際的医療人材の育成(1)

目的・目標

グローバルスタンダードに対応した医学部を新設します。

国際性豊かな医学教育のモデル事業を行い、感染症への対応を含む、高い総合的な診療能力を身につけた、国際医療協力(※)および、地域医療で活躍する人材を育成します。

※特に、東南アジア諸国(特に、カンボジア、タイ、ベトナム、ミャンマー、ラオスの5ヶ国)およびアラブ諸国を中心

医学部学生 (定員140人)

○国際医療協力や地域医療貢献への志が高い学生を、小論文、面接等で時間をかけて選抜。

○東南アジアなど海外からの留学生も受入れ予定。

○世界医学教育連盟(WFME)の標準を超えた医学教育。特に、診療参加型臨床実習に重点。

○国際性に富んだカリキュラムを編成。海外の医療制度等を現地まで調査に行く授業を用意。

○定員中20人を特別国際枠として、海外研修を必修など、より国際性の高いカリキュラムを用意。

○授業料は、私立の医学部では一番低い水準を設定。成績上位者については減免措置を行う。
留学生についても大幅に減免する体系を用意。

日本人学生

国際医療協力や地域医療で活躍する人材

留学生

母国のリーダーになる人材

医学部教員

○専任の外国人教員を多数採用、東南アジアを重点地域として各国より採用

○語学から医療事情まで広く教育

1. 医学部における国際的医療人材の育成(2)

医学部の教育方針(ディプロマポリシー)

- ★ 医師としての使命感・倫理観など「医のこころ」を備え、患者中心の医療を展開できる。
- ★ 医療の国際化に対応した幅広い知識と高いコミュニケーション能力を持ち、海外医療の現場で活躍できる。
- ★ 医学・医療に必要なサイエンスとアートを修得し、科学的思考力を基に、質の高い医療を実践することができる。
- ★ 広い教養と寛容な精神を兼ね備え、医療チームの中核的な役割を担うことができる。

2. 国際性に富んだカリキュラム(1)

① 世界医学教育連盟(WFME)の標準を超えた医学教育

- 1 2年間(80週)にわたる診療参加型臨床実習(クリニカルクラークシップ)
- 2 「基礎臨床統合教育」をコンセプトに、常に臨床と結びつけて基礎医学を習得
- 3 充実したリベラルアーツ、6年間にわたる「医のこころ」を通じ、医療プロフェッショナリズムを涵養

② 欧米で実績のある教授法

- 1 多くの授業時間をかけて、世界最大級の医学教育シミュレーションセンターで教育
- 2 60分授業、ICT教材、キーパッド(用途特化小型キーボード)、TBL(チーム基盤型学習)、ケースメソッドなどを導入
- 3 臨床教育では、外国人医師および北米等で臨床経験のある日本人医師を採用し、教育に参加

③ 徹底した語学教育

- 1 英語による授業を積極的に導入
- 2 医学英語教育を6年間にわたり実施、英語による診療が可能なレベルまで教育
- 3 第二外国語として国際社会で使用頻度の高い言語の他、アジアやアラブ諸国の言語についても学修の機会を提供
- 4 希望者に対し、海外における臨床実習を可能とするUSMLE(米国医師国家試験)対策の特別授業

④ 国際医療保健学 (海外の医療事情の調査(実地あり)・報告)

- 1 特別国際枠の学生は、東南アジアおよびアラブ諸国から1ヶ国を選択し、1年次から5年次まで毎年2~3週間程度、その国の医療事情や文化を現地で調査、英語での報告会を実施
- 2 一般学生についても、新興国の医療事情などを学ぶ国際医療保健学を3年間必修にするとともに、1ヶ月程度、東南アジア諸国等で研修

⑤ 特別臨床実習 (海外医療)

- 1 6年次に、選択科目として、数週間にわたる海外医療施設での臨床実習を設置

2. 国際性に富んだカリキュラム(2)



- 東南アジアやアラブ諸国等の医療事情を学ぶ「国際医療保健学」を必修とし、国際保健・グローバルヘルスの概念、熱帯医学、国際保健医療教育など、最近の国際保健の動向を学修する(特別国際枠・一般枠とも必修)。

- 特別国際枠の学生は、アジア新興国およびアラブ諸国から1ヶ国を選択し、その国の医療事情や文化を調査(2~3週間程度の現地調査も実施)も行い、5年次に英語による報告会を開催。

- 6年次には、選択科目として、数週間にわたり海外医療施設での実習・学習を行う「特別臨床実習(海外医療)」を設置する。

- 英語による問診や診察などができるようになる医学英語教育を6年かけて実施する。全員に積極的な英語教育を行い、TOEICでその習熟度を判定。

- 第二外国語として、国際社会で使用頻度の高いスペイン語、フランス語などに加え、アジアやアラブ諸国の言語についても学修の機会を提供する。

- 世界最大級の医学教育シミュレーションセンターを開設し、1年次の導入教育から4年次以降の臨床実習に至るまで、積極的に医学教育に使用。

- 同時に、同センターにおいて有効な医学教育手法を研究開発し、世界に発信する。

《留学生対象》

- 日本における臨床実習や医師国家試験受験に充分対応できる日本語教育に加え、日本の医療保険制度など日本型医療の仕組みを学修する。
- 本学での学修を円滑かつ効果的に進めるため、東南アジア諸国などに日本語学校を展開し、準備教育も行う。

3. 大学院レベルでの資格保有者に対する高度な医学教育

目的・目標

母国等で医師や看護師等医療に関連する資格を既に取得した人に対する、高度な医学教育を目的とします。また、「日本型医療」の輸出を推進していくための人材育成および国際医療保健の情報集積の拠点となりうる大学院とします。

【目的・目標の実現にむけて】

- 東南アジアやアラブ諸国を中心とする新興国の医師やメディカルスタッフを対象に、わが国の優れた医療技術や病院経営に関するノウハウを習得するプログラムを提供し、「日本型医療」を導入した出身国の基幹病院等で活躍できる人材を育成します。
- 博士課程、修士課程、短期の研修プログラムを用意し、数百人規模に教育します。
- 各国の医療制度から文化まで幅広く情報収集・集積、研究を行う「**国際医療協力センター(仮称)**」を設置し、国際医療協力の際の情報源とします。

研究テーマ1 海外医療システム

海外医療制度、国際医療援助などの海外医療システム講座を設置
各国の医療制度から文化まで幅広く情報収集・集積、研究を行う「**国際医療協力センター(仮称)**」を設置

研究テーマ2 感染制御

「**感染症国際研究センター(仮称)**」を設置し、海外からの感染防止を担える人材、および海外で活躍できる人材を育成

4. 国際水準の病院を併設

目的・目標

タイのバンコク病院やバムルラード国際病院、シンガポールのラッフルズ病院などは、アジアのハブ病院として、多数の外国人に対し質の高い医療サービスを提供しています。成田市に開設を計画している600床規模の病院も同レベル以上の高い医療サービスを提供します。

【目的・目標の実現にむけて】

① 東京オリンピック・パラリンピックに対応でき、その後も国際的に発展できる病院を設置します。

- 英語など外国語が堪能な医師やメディカルスタッフを配置
- 外国人カウンターを充実(10ヶ国語程度対応)
- 充実したアメニティ(各国の食事提供、ジムやプール完備等でホテルのような居心地)
- 宗教関連施設(教会、寺院、モスク等)を整備
- 山王病院(東京都港区)、国際医療福祉大学三田病院(東京都港区)等外国人の来院が多い病院との連携

② 最先端の医療を提供します。

- 世界に通用する最先端医療を実施(最先端の高度医療機器、世界的に有名な外国人医師の招聘等)
- 保険外併用療養の拡大等を実施し、海外で実績のある医療技術の導入
- 医学部・大学院との密接な連携による最先端医療の研究開発を促進

③ 海外医療機関と連携し、東南アジア諸国等の医療レベルの向上を図るとともに、日本の優れた医療技術を海外に展開します。

- 海外医療機関との連携の基地として、国際遠隔診断センター(仮称)を設置、ベトナムやミャンマーの医療機関と接続し、病理診断、放射線診断等を実施
- 診療技術、検査機器、通信機器の輸出

5. 産学連携による医療機器の研究開発と大規模研修センターの設置による日本の医療機器輸出増大の支援

目的・目標

産学連携による医療機器の研究開発を行うとともに、海外に建設する病院運営の担い手となる人材育成を、他大学及び医療産業、東芝メディカルシステムズ(株)、浜松ホトニクス(株)、サクラグローバルホールディングス(株)、パナソニック(株)やベンチャー企業等と共同して進めます。

【目的・目標の実現にむけて】

- 医療機器メーカー等と協力し、最新鋭の高度医療機器の共同開発や、医療用・介護用ロボット技術の研究開発拠点を整備します。
- 医学教育シミュレーションセンター及び企業との共同運営による「**トレーニングセンター(仮称)**」を設置し、海外の病院において日本から輸出した医療技術の継続的な利活用を確保するために、その担い手となる輸出先国等の人材育成を行います。
- 同センターは成田市に整備する病院に隣接して設置し、医師、看護師、並びにメディカルスタッフがすぐに研修を受けられるよう利便性を確保します。
- 世界中から医療関連の多職種の人材が集まり、国境や職種を超えて研修できる場を提供します。
- 受講者の様々な要望に合うよう1ヶ月～2年間程度の複数のコースを用意します。

※国際医療福祉大学の国際的活動(1)

学生の国際交流: 国際医療福祉大学は、これまでも数多くの留学生を受け入れ、また本学学生を海外に派遣することで、国際性を有した医療スタッフの育成に寄与してまいりました。

•開学以降、今年度までに累計で約350名の留学生を受け入れました。この内、現在77名(学部生34名、大学院生等43名)が本学で学んでいます。

•本学学生の海外派遣も推進しており、2013年度までに累計で1,766名の学生が、総合教育科目「海外保健福祉事情」により海外研修に参加しました。

•2014年度は、526名の学生を派遣する計画です。本学は現在、9カ国(地域)、19大学・施設と協定を結んでおり、更に協定先を広げていく計画です。

海外協定校・施設一覧: 9カ国(地域)、19大学・機関・病院

区分	国(地域)名	協定先
大学	台湾	元培科技大学
	タイ	マヒドン大学(公衆衛生学部)
		クリスチャン大学
	米国	フィラデルフィア科学大学メイズカレッジ
		コロラド大学デンバー校(看護学部)
		ハワイ大カピオラニコミュニティカレッジ
	中国	首都医科大学康復医学院
	韓国	建陽大学校
		仁済大学校
		大邱韓医大学校
乙支大学校		
シンガポール	ナンヤンポリテクニク	
ミャンマー	国立ヤンゴン看護大学	
	国立ヤンゴン第一医科大学	
	国立ヤンゴン医療技術大学	
機関	中国	中国リハビリテーション研究センター
	オーストラリア	ゴールドコースト インスティテュート オブ ライフ
病院	ベトナム	国立チョーライ病院
		ホーチミン医科薬科大学



ベトナム 国立チョーライ病院における研修風景(2011.8)



新宿けやき園(グループの医療福祉施設)を視察する留学生(2014.1)

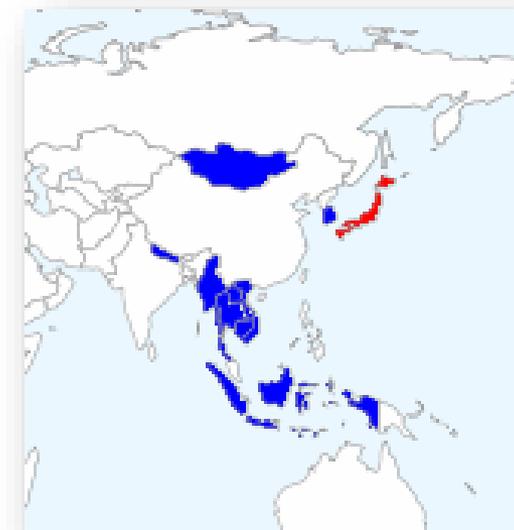
※国際医療福祉大学の国際的活動(2)

IUHW奨学生:ミャンマー、ベトナム、カンボジアなどから、将来各国における医療分野での指導者となる人材を、フルスカラーシップで受け入れ、養成しています。

•IUHW奨学金制度は、在学中の学費、教材費、交通費、住宅費をフルにサポートし、優秀で志の高い人材が日本で学ぶ機会を提供するものです。

•各国の大使館や行政機関(保健省など)、アジア婦人友好会との連携のもと実施しており、2001年度以降、今年度までに15名(学部生10名、大学院生5名)を受け入れてきました。

•2013年度は、大学院で4名(ミャンマー3名、カンボジア1名)の受入を行ったところであり、2014年度は、大学院で5名(ミャンマー4名、タイ1名)の受入れを行いました。



ベトナム	2名
モンゴル	3名
ネパール	1名
ミャンマー	8名
韓国	1名
インドネシア	1名
カンボジア	2名
ラオス	1名
タイ	1名
計	20名



在日ミャンマー大使夫妻と2013年度IUHW奨学生
(2013.6)



2014年度IUHW奨学生 奨学金授与式
(2014.6)

※国際医療福祉大学の国際的活動(3)

ベトナムを対象とした国際協力活動①

1974年に日本の無償資金協力により建設された、ベトナム南部における拠点病院であるチョーライ病院と本学とは、1995年の本学開学時から、教員の現地への派遣等を通じて密接な協力関係にあり、2011年6月には協力協定も締結しています。

これまでに実施した、チョーライ病院の管理体制や医療経営のサポートに加えて、チョーライ病院内に障害者支援センターを設立したプロジェクトはベトナム政府からも高い評価を受け、ベトナム保健大臣から「国民の健康勲章」を受賞しました。

2011年には経済産業省委託事業として、本学の長村義之教授(元日本病理学会理事長)が中心となって、チョーライ病院と本学附属三田病院を専用回線をつなぎ、遠隔診断実証実験を成功させましたが、2015年1月にはさらに、ベトナム国内の病院間ネットワーク確立に向けた実証実験を行う予定です。

2013年にはチョーライ病院の医師の育成のため、同病院の若手病理医師を、本学附属病院三田病院で約3か月間に渡って研修医として受け入れ、日本の高度な病理診断技術の研修を実施しました。また、チョーライ第二病院建設のための準備が進められていますが、本学はその調査グループのメンバーとしての協力を行いました。

2014年1月には、調査の一環として来日されたベトナム保健省副大臣及びチョーライ病院長他全11名に対し、本学大学院で日本の医療制度等に関する講義を行うとともに、附属病院等における視察受入を行いました。

2014年10月には、本学関係者がベトナム保健大臣を表敬訪問し、今後の協力について意見交換を行い、チョーライ病院から提案のあった、予防医療等の分野での協力についても、大臣からは全面的に支援するとの発言がありました。今後はこれらの分野において、積極的な協力を推進していきます。



本学教員による外来での現地指導
(2006.1)



チョーライ病院との協定書締結
(2011.6)



ベトナムとの遠隔画像診断プロジェクト
(2011.11)



ベトナム保健省副大臣他の三田病院視察
(2014.1)



ゲン・ティ・キム・ティエン保健大臣との協議(2014.10)

※国際医療福祉大学の国際的活動(4)

ベトナムを対象とした国際協力活動②

時期	プロジェクト名	内容
1995.4-1999.3	チョーライ病院プロジェクト	総合的な病院管理体制の改善及び病院情報ネットワークシステムの改善を目的として、本学の教員(高橋淑郎教授)を常勤スタッフとして長期派遣。当時の国立国際医療センターと協力しながら、チョーライ病院の医療経営を全面的にサポートした。
2006.1-2008.12	JICA草の根協力事業「地域リハビリテーション及び障害当事者エンパワメントを通じた身体障害者支援事業」	チョーライ病院に身体障害者支援センターを設立。通所リハ・訪問リハ・障害当事者のエンパワメントの3つのサービスを立ち上げ、主に脳卒中と頭部外傷を有する障害者の社会参加を支援。本学からは、長期派遣された林由美子講師の他、短期派遣のPT.OT.STを加えて延べ29名の教員を派遣し、同病院での現場指導を行った。 なお、本プロジェクトはベトナム保健大臣より「国民の健康勲章」を受章した。
2010.4-2013.3	JICA技術協力プロジェクト「南部医療機関リハビリ強化プロジェクト」	チョーライ病院におけるリハビリテーション基準を調査し、南部地域医療機関において提供される脳血管障害及び頭部外傷に関するリハビリテーション向上を目的に、国際医療福祉大学の教員が現地で短期指導・教育を実施した。
2011.11	「遠隔病理・画像診断サービス提供プロジェクト」(経済産業省委託事業)	日本の医療サービスの海外展開に関する調査事業として、本学の長村義之教授が中心となり、チョーライ病院と国際医療福祉大学附属病院を専用回線をつなぎ、遠隔診断実証実験を成功させた。
2001-	IUHW奨学金制度	本学では2001年に、アジア各国において指導的立場となる人材の育成に寄与するため、学費のほか、住宅費などをフルサポートするIUHW奨学金制度を設けている。この制度により、2001年にチョーライ病院から本学看護学科において留学生受入を行った。
2013.4-2013.7	チョーライ病院からの研修医の受入	チョーライ病院の若手病理医師を研修医として、国際医療福祉大学三田病院で約3か月間に渡り受け入れ、日本の高度な病理診断技術の研修を実施した。
2014.1	チョーライ第二病院整備事業への協力	チョーライ第二病院整備事業準備調査の一環として来日された、ベトナム保健省副大臣他4名及びチョーライ病院病院長他5名に対して、本学大学院において日本の医療制度等に関する講義を行うとともに、附属病院等における視察受入を行った。
2015.1(予定)	「遠隔画像診断・研修センター構築」に係る実証調査事業(経済産業省委託事業)	2011年に実証実験に成功したチョーライ病院との遠隔診断事業を発展させて、ベトナム国内の病院間ネットワークの構築に向けて、ハノイのバックマイ病院・チョーライ病院・国際医療福祉大学三田病院の三極間での実証実験を行う。

※国際医療福祉大学の国際的活動(5)

ミャンマーを対象とした国際協力活動①

我が国が、国際医療協力の重要な対象国の一つとして位置づけているミャンマーに対しても、本学は積極的な協力を行ってきました。

2008年7月から2013年3月にかけて、JICAの委託を受けて実施された、リハビリテーション強化プロジェクトでは、国立リハビリテーション病院のリハビリ分野でのサービス向上を目的として、本学教員(OT)を専門家として長期派遣した他、研修員の受入れを実施しました。

本学は学費や滞在費をフルサポートする「IUHW奨学金制度」を設けており、アジア各国の大使館やアジア婦人友好会と連携のもと、将来各国で指導的立場となる医療専門職の育成に寄与するため、これまでにアジア各国から15名の留学生を受け入れています。

この内、ミャンマーからは2013年度に3名の留学生(医師・薬剤師・理学療法士各1名)を大学院で受入れており、さらに2014年度は4名の留学生(医師2名、理学療法士2名)の受入を大学院で行い、修了後は母国において、各医療分野における指導者として活躍していただくこととしています。

2013年4月には、ヤンゴン看護大学の学長及び学部長を日本にお招きし、本学附属病院等の視察や、日本の医療制度に関する講義を行いました。

またミャンマーとの相互交流を更に推進するため、2013年度は、ミャンマーの医療系大学3校(ヤンゴン第一医科大学・ヤンゴン医療技術大学・ヤンゴン看護大学)と 学術交流協定を締結し、2014年8月には、本学学生(11名)と教職員(2名)をヤンゴンへ派遣し研修を行うとともに、現地の学生・教職員との交流を深めました。



ミャンマーでのリハビリ指導の様子
(2008.7)



2014年度IUHW奨学金授与式
(2014.6)



ヤンゴン第一医科大学との協定調印
(2013.12)



ヤンゴン医療技術大学との協定調印
(2013.12)



ヤンゴン看護大学との協定調印(2013.12)



ヤンゴンへの学生派遣(2014.08)

※国際医療福祉大学の国際的活動(6)

ミャンマーを対象とした国際協力活動②

2014年7月6日に都内において、ミャンマーにおける保健医療の現状や課題に関する認識を深め、今後の我が国による医療国際協力に係る機運の醸成を図ることを目的に、「ミャンマーと日本の国際医療協力に係る今後の展開」をテーマとして、ミャンマー国際医療シンポジウムを開催しました。

当日は、ミャンマー保健省から、テイン・テイン・テイ副大臣、ヌエ・ヌエ・ウ保健計画局長に御出席をいただき、基調講演をいただくとともに、本学と協定を締結している、ヤンゴン第一医科大学・ヤンゴン看護大学・ヤンゴン医療技術大学の各学長にパネリストとして御出席をいただきました。

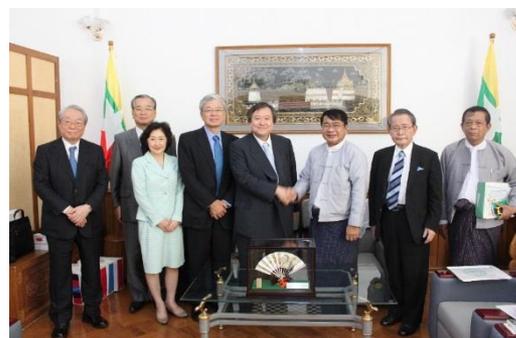
日本側からは、医療に関して官民学術それぞれの分野を代表する方々に講演者及びパネリストとして御参加をいただき、約370名の参加者のもと、活発な議論が展開されました。

2014年10月には、本学関係者がミャンマー保健大臣を表敬訪問して、今後の協力推進に関して意見交換を行いました。大臣からは、国立リハビリテーション病院の建替えに係るノウハウの提供や、リハビリテーション分野での人材育成への協力について要請があり、本学としても具体的な協力内容について検討を進めるとともに、今後は、長期留学生や短期研修生の受入を行う予定です。

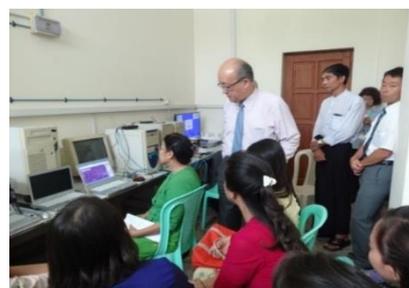
2014年11月には、経済産業省からの委託事業として、ヤンゴン第一医科大学と国際医療福祉大学三田病院をインターネットでつないだ、遠隔診断実証実験を行い、成功を収めました。今後は、この結果を活用し、遠隔診断機能を有する研修センターの設立等について検討を進めてまいります。



ミャンマー国際医療シンポジウム(2014.07)



タン・アウン保健大臣との協議(2014.10)



遠隔診断実証実験(2014.11)

※国際医療福祉大学の国際的活動(7)

中国を対象とした国際協力活動

時期	プロジェクト名	内 容
1996～ 2001年	アジア地域における衛星を利用した遠隔リハビリテーションシステムに関する研究開発プロジェクト	大田原キャンパスに「那須遠隔リハビリテーションリサーチセンター」を設置し、中国リハビリテーション研究センターと世界で初となる“衛星通信によるリハビリテーション教育”の実証実験を開始。本学から杉原素子先生、矢谷令子先生が参加し、本学の初代大学院長の初山泰弘先生も中核的な役割を果たす。
2001～ 2006年	中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト	PT・OTの4年制大学の設立(首都医科大学リハビリテーション医学院)と一期生が卒業するまでの教育課程の支援。 ⇒本学独自の受け入れ制度と合わせ、24名の留学生を受け入れ。 留学生はPT、OTの国家資格を日本で取得し、中国でリハビリの指導者として活躍。 ⇒本学からは約40名の教員をリハセンターに派遣。 シラバスの構築、講義方法の支援、模擬講義を実施
2008～ 2013年	中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト	中国リハビリテーション研究センターを中核として、地方の3地域(陝西省、重慶市、チワン族自治区)におけるリハビリテーション人材養成の新しいモデルシステムを構築。 ⇒大学院での教員育成、本学教員の派遣、遠隔システムの構築の分野で積極的に支援。 本学の遠隔授業システムをベースとしたモデルシステムが2009年スタート。
2011～ 2012年	遠隔病理・画像診断プロジェクト	経産省の推進する国際医療交流事業の一環として、本学は2011～2012年にわたり、中国とベトナムで「遠隔病理・画像診断プロジェクト」を実施した。このプロジェクトは、日本の優れた診断技術と高度な検査機器技術、情報通信技術を融合させ、病理や画像診断分野の専門医が不足しているアジア諸国で遠隔診断システムを展開したもので、中国はナショナルセンターである中国リハビリテーション研究センターと、ベトナムは南ベトナム最大の基幹病院である国立チョーライ病院と、国際医療福祉大学三田病院をそれぞれ専用回線をつなぎ、さまざまな症例を遠隔で診断、無事実験を成功させた。

※国際医療福祉大学の国際的活動(8)

その他の国々を対象とした国際協力活動

➤ ケニア

- 事業名 : 医療技術教育プロジェクト
- 期 間 : 1998年3月～2003年2月
- 内 容 :
ケニア国立医療訓練カレッジの教育レベル向上を目的とするJICAのプロジェクトを支援し、チームリーダーを含む教員の派遣と研修員の受入れを実施。



ケニア・ナイロビのカレッジにて講演(1998)



ポイト・カレッジ学長を表敬訪問(1998)

➤ タイ

- 事業名 : 国際寄生虫対策アジアセンタープロジェクト
- 期 間 : 2000年3月～2005年3月
- 内 容 :
タイ及び周辺国(カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム)の寄生虫対策に係る国際研修の実施、情報ネットワークの構築等を目的とした広域技術協力プロジェクトを実施。本学はチーフアドバイザーとして小島教授を派遣。



タイにおける学校保健の様子



タイ国際研修(人材育成)

➤ カンボジア

- 事業名 : カンボジア医療技術者養成プロジェクト
- 期 間 : 2003年9月～2008年9月
- 内 容 :
2001年度から事前調査も含め同プロジェクトに協力。医療従事者養成学校整備のため秋山教授(PT)、藤沢教授(PT)、金場准教授(RT)を派遣。



カンボジア医療技術学校



カンボジアにおける物理療法機器検査